

新種発見物語

足元から深海まで11人の研究者が行く！

島野智之・脇司（編著）

岩波書店 2023年3月17日発行 270 pp.

ISBN: 978-4-00500-966-4



本書は、第一線で活躍する研究者11名が各々の「新種発見」の体験について綴った書籍である。「種」は生物を分類する基本単位であるが、地球上に学名の付けられていない未記載種はまだ多い。新種発見とはこのような未記載種を発見・整理し、新たに文献に記載する取り組みと言える。新種の発見が取り上げられることはニュース等でもままあるものの、そこに至る研究過程とそこで得られた感動についてはその分野の研究者以外が知る機会はあまりないように思う。本書はこれらの体験を一般、特に若い世代に向けて伝えようとする一つの試みであり、貴重な存在と言えよう。本書で取り上げられる生物は昆虫、真菌、貝類、魚類、鳥類、植物、甲殻類、寄生虫など非常に多岐にわたっており、森林、土壌、河川、遺跡、海底洞窟、深海など、研究のフィールドもまたバラエティ豊か。生物の多様性とともに関者の多様性も示す一冊となっている。

本書は10章と「知識メモ」で構成されている。第1章ではコケに棲む昆虫の共進化と多様性について、第2章ではゲンゴロウの仲間から見つかった隠蔽種について、第3章では冬虫夏草と地下生菌、そして植物の根と共生する菌根菌について、第4章では身近なところで見つかった陸産・海産の貝類について、第5章では沖縄やフィリピンの川に棲む模様鮮やかなハゼについて、第6章では遺跡で出土した骨の分析から見出されたアホウドリの隠蔽種について、第7章では圧倒的に多様な東南アジアの森林植物相の解明について、第8章では暗闇の海底洞窟から続々と見つかる新種について、第9章では深海の調査とそこに棲む多様な深海生物について、それぞれ取り上げている。そして最終章では、日本産トキと共に絶滅した寄生ダニと、絶滅が危惧されるヤンバルのオオムカデを題材に、新種の発見と保全について論じている。各章は独立しているため、特に興味のある生物の章から読み進めても良いだろう。

生物学の研究者である私自身としては各々の体験に共感できる場所もあり、最先端の知見に触れることもでき、最後まで面白く楽しく読むことができた。本書は岩波ジュニア新書から刊行されており、まえがきでも若い世代に向けたメッセージが記されている。巻末の「知識メモ」では専門的な用語・概念などを平易な言葉で解説しており、生物学・分類学に興味を持つ初学者が手に取りやすいよう配慮がなされている。一方で、研究者がそれぞれの専門について語っているため、入門書として

見ると多少内容が高度な部分もあるかもしれない。特に、遺伝情報の解析は現代では新種の記載に避けて通れない部分で、各章でも話題が上がっているが、「知識メモ」では解説にあまり紙幅を割いておらず、初学者の理解が追いつくか不安に感じた。とは言え、細かい点で理解しきれない部分があったとしても、いずれのエピソードも新種発見に至るまでの研究者の興奮や感動が確かに伝わってくる文章となっている。本書と似たコンセプトの書籍としては『新種発見！見つけて、調べて、名付ける方法』（馬場ら、2022）が3カ月ほど先行して出版されている。著者も一部重複しているこちらの書籍は、21名による新種発見にまつわるエピソード19編からなり、1エピソードあたり8ページ前後。新たに出版された本書は1章あたり20数ページとなっている。どちらも新種の発見をテーマにした書籍ではあるが、前者がその一つの種の発見に焦点を当てて取り上げているのに対し、本書はページ数も多い分、各研究者の人生における新種発見の位置付けを見ることができ、より一人一人の研究者にスポットライトが当たる内容という印象を受けた。もちろん新種の発見自体についても語られているが、その発見に至る道のり、ある研究対象から別の研究対象へ興味が広がっていく過程、さらに発見の先に何かがあるのか、といった広い視点でも研究を知ることができる。両書を読み比べてみるのも一興だろう。

まえがき、そして最終章で編者らが述べているのは「新種発見」を通じて生物と生態系の保全に貢献したいという情熱と使命感である。本書を通じてより多くの人が、研究者が研究対象に傾ける情熱を知り、新種発見の興奮と感動を追体験することは、生物の保全という、研究者だけでは決して達成し得ない取り組みにも良い影響を及ぼすことだろう。うみうし通信の読者を含め、いきもの好きであればきっと楽しむことができる本と思う。手に取ってみることをおすすめする。

梅田剛佑
(水産研究・教育機構 水産技術研究所)

文献

馬場友希・福田宏（編）2022. 新種発見！見つけて、調べて、名付ける方法. 224 pp. 山と溪谷社, 東京.